

116 誌上発表

『医心方』における当帰の応用

星野 卓之, 小曾戸 洋, 花輪 壽彦

北里大学東洋医学総合研究所

当帰の薬能について、『神農本草経』は「治欬逆上気。温瘡寒熱洗洗在皮膚中。婦人漏下絶子。諸悪瘡瘍。金創。煮飲之」とするのみで、近世になって重視される「養血」の記載はもともとなかった。その後の『傷寒論』では厥陰病篇のわずか4方（烏梅丸・当帰四逆湯・当帰四逆加呉茱萸生姜湯・麻黄升麻湯）に当帰が含まれるが、和田東郭など江戸の諸家にはこれらを『千金方』など隋唐に由来する処方とみなし、本来の張仲景方ととらない者もあった。また『金匱要略』でも当帰の利用は限られており、仲景以後に当帰がどのように活用されてきたかは明らかでない。『医心方』は隋唐時代までの処方をよく保存しており、宋以後に出版された医書と比べて構成生薬については改変が少ないと考えられる。仲景以後・唐以前の当帰の応用を明らかにする目的で、『医心方』所載方の剤型・構成生薬・適応を調査した。

『医心方』で当帰を含む146処方の内訳は湯剤58(50%)、散剤39(33%)、丸剤18(15%)で内用が8割を占め、外用は2割であった。内用の湯・散・丸剤の構成生薬数は平均でそれぞれ5.7, 6.7, 10.3となっており、丸剤で構成生薬が多い傾向があった。引用医書は『千金方』(23処方)、『(古今)録驗方』(14処方)、『産経』(13処方)、『劉涓子方』(12処方)、『小品方』(11処方)の順に多かった。引用医書ごとに剤型を調べると、特徴的なことに『千金方』で外用(11処方)と内用の散剤(10処方)が多く、湯剤・丸剤は1処方のみであった。湯剤(内用)について当帰とともに用いられる生薬として多かったのは、甘草(31処方)、桂心(19処方ただし桂肉2処方を含む)、芍薬(18処方)、乾薑(17処方)、人參(16処方)であった。当帰の適応は主に出血性疾患(膿血・血便・下血・血淋・汗血・吐血など)であり、外傷性の瘀血や婦人陰蝕、産後の諸症にも用いられていた。『傷寒論』処方に近いものとしては『小品方』の茱萸四逆湯が当帰四逆加呉茱萸生姜湯去大棗という構成であったほか、『金匱要略』方も含まれていた。

『医心方』は引用書籍を明らかにするという『外台秘要方』の編集方針にのっとり、当時の日本で用意し得た処方集から独自にまとめられているが、さらに『傷寒』・『金匱』と『千金方』を他の処方集で補完するという編集方針があったものと考えられた。また国内で入手しやすく構成生薬の少ない処方が優先されているものの、丸剤については多剤のものが目立った。『千金方』では宋改で当帰湯など多数の同名異方が存在するようになったことが確認されている。また校正時にはすでに保存状態が悪かったとされる『傷寒論』厥陰病篇や『金匱要略』の当帰を含む処方についても、新たな編入や処方名・構成生薬の改変がなされた可能性が高い。よって生薬・処方の応用の変遷を考察するうえで、『医心方』のさらなる解析は意義あるものと考えられた。今回の調査では当帰は隋唐時代に外科・婦人科疾患で主に用いられたことが確認されたが、養血という適応はみられなかった。当帰の適用拡大については、より後世の処方集について調査が必要と考えられた。